

氏名	ヒガシ ウラ アキコ 東 浦 亜希子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第192号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉 R. Schumann Papillons op. 2 R. Schumann Intermezzi op. 4 R. Schumann Davidsbündlertänze op. 6 〈論文〉 ローベルト・シューマン《ダーヴィット同盟舞曲集》作品6の再考 －「新しい詩的な時代」に向けた作曲手法とは－
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 粕谷美智子
（副査）	〃 准教授（ 〃 ） 伊藤 恵
（ 〃 ）	〃 教授（ 〃 ） 大角欣矢
（ 〃 ）	〃 〃（ 〃 ） 檜山哲彦
（ 〃 ）	国立音楽大学 〃 藤本一子

（論文内容の要旨）

本研究は、ローベルト・シューマン（1810-56）の初期のピアノ小品集《ダーヴィット同盟舞曲集》作品6について、シューマン自身が掲げた「新しい詩的な時代 *neue, poetische Zeit*」という観点から再考し、これまで示されてこなかったその作曲構想の独自性を明らかにしようというものである。この作品は、シューマンの活動と深く関連する「ダーヴィット同盟」が標題に掲げられた作品であり、彼にとって人生と創作の両面において特別な位置づけにあった。その背景を探究することも重要な課題である。

シューマン初期のピアノ作品は、多様な「詩的・音楽外的なもの」を内包し、音響世界にとどまらないものが背後に潜められている。それは、シューマンが音楽と文学を同じ根源に発するものとみなし、音の中に詩や物語を連想し、あるいは言葉の背後に独自の音楽を聴きとろうとしていたことから説明される。そして一歩進んで、「詩的なもの」は作曲手法としても現実化される。

本論文では第1章で、初期ピアノ曲における「詩的なもの *Das Poetische*」を考察する前提として、彼の1827-28年の日記から、「詩的 *poetisch, dichterisch*」という語を抽出し解釈した。それらの記述から、「詩的なもの」は、内的な心情の純粹さや、拘束されない自由さに立脚していると推察される。ここで表明された本質的な次元での「詩的なもの」は、同時代に向けて公的に発信する理念として変化していく（第2章）。同時代の気風として高まっていたフィリステ人を打破する批判精神や、新しい時代の形成に向けた動きの中、1835年、シューマンは「新しい詩的な時代」の理念を立ち上げたのである。

シューマンの新しさへの姿勢は、「ダーヴィット同盟」の活動と、もう一方の柱でもある初期ピアノ作品にも反映されている。当時の批評を通覧すると、シューマンの初期ピアノ作品は、その成立当初から難解で不可解とすら受け止められていたことがわかる。当時においては、自然な構成を逸脱していることへの違和感がそのような批判を生じせしめたのであるが、近年においては、そうした手法の観点が、逆に作品の本質を探る際の切り口として用いられている。そのため、本研究では、楽曲の構造的な斬新さを考察するための方法論として、「断片」の形式に注目しながら、初期の小品を構築する手法を捉えることを試みた。

次に第3章では、「ダーヴィット同盟」が立ち上がるまでの初期のピアノ小品集3作品を考察した。《パ

ピオン》作品2、《間奏曲集》作品4、《クララ・ヴィークのロマンスによる即興曲集》作品5は、文学作品との関連や音名象徴、作品外的なもの、5度下行の主題、標題などに、それぞれ特有の「詩的・音楽外的な暗示」を孕んでいる。そして、それらの音楽外的なものが作曲手法と統合され、新しい音楽構造が模索されている。

これらを踏まえて、本題である《ダーヴィト同盟舞曲集》作品6では、成立と受容（第4章）、作品論（第5章）の3つの観点から論を進めた。1838年初版と1850年改訂版では、作曲家の姿勢が異なるが、本稿では作品6を分析するにあたり、文学的表現が多く付された初版に基づいて考察を行った。成立当時の批評のうち作品6の精神性を捉えているものとして、ダーヴィト同盟員E. ソボレフスキによる『音楽新報』誌上の評論が挙げられる。彼は、音楽形式には言及していないものの、ジャン・パウルの『美学入門』の一節を引用することで、ここに詩的な形式が実現していることを示した。

作品論では、まず音楽外的な暗示に注目した。表紙に刻まれた「古い格言」とクララ・ヴィークのモットーは、作品を先導していく精神的なモットーの役割を担っている。さらにシューマンが自ら彫版の指示を出した初版の表紙も、作品の理念を表すものとして注目される。次に、楽曲構造と詩的なものを総合的に考察した。執筆者としてのフロレスタン [F.] とオイゼビウス [E.] の楽曲には、対話のような対応関係も見られる。演奏指示や文学的表現、「遙かなもの」とエコーの音などの暗示的なものは、楽曲構造と不可分に結びつくことで、よりイメージ豊かになっている。

これらを全て包み込むのは、最も純粋な調性であり、クララを暗示する調であるハ長調への到達というツィクルスに通底するプログラムである。1828年の日記において表明された自由な拍節法も作品6を特徴づける要素であり、楽曲は、詩的な暗示をまといながら、作曲手法において「新しさ」と「自由さ」に立脚している。

このように、作品6の「詩的なもの」は、多彩をきわめている。しかしそのありようこそ、彼の多面的な音楽を支えるものであり、《ダーヴィト同盟舞曲集》の「詩的」楽曲構造こそ、1837年頃までのシューマンの革新的な姿勢が最も反映された集大成なのである。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、R. シューマンの初期のピアノ小品集「ダーヴィト同盟舞曲集」作品6の再考と題し、シューマン自身が掲げた「新しい詩的な時代 *neue, poetische Zeit*」という観点から再考し、これまでに示されてこなかった其の作曲構想の独自性を明らかにしようというものである。多様な「詩的、音楽外的なもの」を内包する初期のピアノ作品において、シューマンは詩や言葉の背後に独自の音楽を聞き取ろうとしていたこと、彼の日記を精読し「詩的なもの *das Poetische*」とは内的な心情の純粋さ、拘束されない自由さに立脚していると推察（第1章）。日記に表明された「詩的なもの」は、同時代に向けて公的に発信する理念として変化し、機関紙「音楽新報」において其の構想が現実化され、シューマンの文筆活動（音楽批評）から、彼の文体の華麗さ、叙述の技法の多様さにも注目、シューマンの詩的文学的文章様式は音楽に寄り添った新しい手がかりとなったこと、シューマンは「詩的なもの」という言葉に、世界を生まれ変わらせる希望を託そうとしていたこと、それはシューマンの生き方そのものの根幹にあり、音楽の本質にかかわるキーワードであるとし、また初期のピアノ作品に反映されているシューマンの新しさへの希求が、当時の聴衆、批評家にどのように受け止められたかを取り上げ、『全体の自然さ』に重きを置いていた当時の批評家にとって、シューマンの手法は逸脱しているといわざるを得ないとし（第2章）、続く第3章で、その作曲手法について詳細に検討、《パピオン》作品2、《インテルメッツォ》作品4－逸脱の手法、《即興曲集》作品5－変容の手法が取り上げられる。第4章で《ダーヴィト同盟舞曲集》作品6の成立背景と初版と改訂版の比較検証、当時の評価、第5章では幅広く作品論を展開、分析は申請者の細やかな表現と文章力によって説得力をもって説明され、言葉の裏からは、其の

音が聞こえてきそうである。本研究から得られたそれぞれの成果は、各審査の方々の所見を参考にしていただくをしたい。演奏審査会では、本研究を通し得た確固たる知識と信念とに裏づけされた表現が、決して強引な主張にはならず、しかし明確な語り口でもって、美しい音色と何よりもシューマンへの敬愛の念を持ってなされ、聴く者の心をつかんでいた。

論文審査会では、論文の作法としてどのように論を展開していくかの見取り図を示す必要性、本研究において新たに証左となりうる記述がいくつかあり、言い切れるのにも思われる部分も控えめな表現に留めているのは惜しまれること、さらなる展開と踏み込みを持って、今後の研究の深まりに大いに期待が寄せられた。

本研究が博士の学位に相応しい学術的成果を示すものであると高く評価され、合格とした。